

論文審査の結果の要旨

上記の論文は、書籍・雑誌流通システムの特徴を、出版社、取次業者（卸売業者）、書店（小売業者）の相互関係に焦点をあてて地理学的に分析したものである。

地理学では、20世紀後半から、流通システムに対する関心が高まってきたが、書籍・雑誌流通業に関しては、身近な事例であるにも関わらず資料的な制約もあり、ほとんど取り組まれてこなかった。本論文は、こうした困難な分野に取り組み、その実態を実証的に解明したという点に第一の意義がある。さらに、流通に関する地理学研究は、企業間の空間的側面すなわち「水平的企業間関係」を重視しがちであったが、本論文は、流通チャンネル内における生産者、卸売業者、小売業者間の関係、すなわち「垂直的企業間関係」の重要性を強調する。この点が本論文の持つ第二の意義である。

本論文は7章から成る。まず、序章で流通地理学における本研究の位置づけと研究目的を述べた後、続く第I章では、地理学を中心とした既存の流通研究の整理と課題の検討を行っている。ここでは、上述のごとく、企業間の相互連携や対立といった垂直的企業間関係に注目し、企業間の相互作用が流通システムの空間構造に及ぼす影響を考察することの重要性を主張している。

第II章では、日本の書籍・雑誌流通業が、中間流通を担当する取次部門において寡占状態にあることに加えて、再販制度や委託返品制度といった固有の商慣行・制度が、流通システムの川下へのパワーシフトの阻害要因として作用しているため、取次会社が書店の経営活動に対して強い影響力を持っていることを明らかにしている。

第III章では、取次会社の帳合書店の全国的な分布とその変化を分析している。とくに取次間における占有率の変動が最も大きかった北海道を事例として、取次会社の占有率の変動に大きな影響を及ぼしているのは、新規出店するチェーン店であり、取次会社にとって、自社帳合にチェーン店をどれだけ取り込むことができるかが、経営上重要な意味を持つことを明らかにしている。

第IV章では、取次会社が構築した雑誌の物流システムが、積載効率や、同一雑誌発売日の地域内統一を優先して物流施設配置や配送ルートが決められているため、結果的に、リードタイムをある程度犠牲にせざるをえないことを明らかにしている。こうした特徴は、コンビニなどの物流システムが、リードタイムの厳守を最優先し、物流拠点の配置もリードタイムとの関係から制約を受けることとは対照的である。

第V章では、福岡県を事例として、当業界で取次との取引関係を意味する「帳合」の異同が書店チェーンの店舗立地にも一定の影響を及ぼしていること、具体的には同一帳合チェーン同士では競争回避的な立地傾向が見られるのに対して、帳合が異なる場合には、相対的に競争的な傾向が強まっていることを明らかにしている。最後に、第VI章では、本研究において得られた知見をまとめ、今後の課題について述べている。

このように、本研究は、これまであまり分析されてこなかった書籍・雑誌流通業の流通システムの特徴について、流通チャンネル内における垂直的企業間関係という一見非空間的な要素が、実際には流通システムの空間的特性の説明要因として重要な意味を持ちうることを、具体的な事例を通じて明らかにした点で、流通システムの地理学研究において重要な意義を持ちうるといえる。

以上のことから、本調査委員会は本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるのに十分な能力をもつものであると認めるものである。